

日韓、東アジアがともに生きるために

森山新（お茶の水女子大学）

2015年は戦後70年、日韓国交回復50年の年であった。しかしながら東アジアでは国家間の関係は依然良好とはいえず、政治による解決の糸口は一向に見えない状況にある。そうした中、我々は教育者、学生としてできることを模索し、3つの教育実践を行った。

第一はTV会議システムを用いた日中韓の対話授業である。中国の大連理工大、韓国の釜山外大と、戦後70年をテーマに政治的タブーをあえて取り上げ、討論を行った。大連理工大とは、歴史教育、日中のイメージ、ステレオタイプ、マスコミ報道、異文化理解などをテーマに、一方、釜山外大とは、戦後処理・賠償問題、領土問題、慰安婦問題、日本の首相の戦後談話をテーマに、忌憚ない討論を行った。実施前には様々な不安もあったが、終わってみると両国の学生から、このような場をいつか持ちたかった、一番よい授業だったなどといった非常に肯定的な反応を得ることができた。

第二は、この日韓大学生国際交流セミナーで、昨年（2014年）の第10回セミナーでは、両国の学生が歴史、反日・嫌韓、日韓交流、戦後70年談話など、常に対立の絶えないテーマを扱い、両国の学生が共同声明を発表した。また「女性の社会進出」という両国が共通して持っている課題にも取り組み、共同声明を行った。

第三は、第5回国際学生フォーラムである。外務省委託の日韓文化交流基金の事業に採択され、同徳、お茶大など日韓150名の学生が、両国の過去を見つめ、互いの良き点を尊敬し合い、そしてともに歩むパートナーとしての第一歩を踏み出す討論の場を持った。

では、東アジアの対立の原因は一体何であろうか。何よりも東アジアの場合にはヨーロッパとは異なり、歴史を直視し、このようなことを二度と繰り返さないといった深い反省が欠如していた。これは特に日本の問題であるが、もう一つの原因として国民教育を挙げることができる。国民教育は近代国家成立とともに世界に広まったもので、国家がその維持・発展のために、国民に必要な資質、能力を育成させると同時に、国に対するナショナル・アイデンティティを築くものでもある。国語はナショナル・アイデンティティ育成に何よりも直結し、地理では世界地図を見ながら自国が小さくとも世界の中心であるというイメージを刷り込まれる。歴史では自国中心の歴史観により、国民が共有すべき歴史認識を植え付ける。文化では、優れた作品、遺産の存在を通じ、自国の優秀性や自尊心が育まれる。さらに国歌斉唱や国旗掲揚を通じ、国家に対する忠誠心が育まれる。これらは決して悪いものと言い切ることにはできないが、グローバル時代を迎え、国家間の関係が緊密になると、国民教育による国家間の認識の差が対立の原因となりうるのである。従ってグローバル時代に日本と韓国、そして東アジアがともに生きるためには、ナショナル・アイデンティティを超え、東アジアという、インターナショナルなアイデンティティを築くための、新たなシティズンシップ教育が求められるのである。

欧州統合の教育政策に深く関わってきたパイラムは、外国語教育は国民教育により自国中心となってしまった我々の視点や価値観をクリティカルに見つめ直すきっかけを与えてくれたとした。またグローバル時代に求められるシティズンシップを育むためには、言語や文化だけでなく、政治をも扱うことの重要性を語っている。我々のこのセミナーも両国の間に立ちはだかつてきた様々な政治、歴史の問題を取り上げ、両国の学生が「ともに生きる」を目標に、毎年熱い討論を展開してきた。戦後70年の歴史を乗り越えんとした昨年セミナーの成功を基盤に、第11回を数える今年には、さらに東アジアアイデンティティの構築と、東アジア共同体建設のために、学生たち自らが先頭に立って成功体験を積むことで、東アジアがともに生きる第一歩を踏み出す場となってもらいたいと考えている。